
すべてを撃ち抜くスナイパー

次郎長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すべてを撃ち抜くスナイパー

【Nコード】

N8502Y

【作者名】

次郎長

【あらすじ】

葬儀社、それは日本の開放を目的に活動する組織である。

その組織に属している男の話

設定（前書き）

少ないですが設定をのせておきます。

設定

オリジナル

主人公

ヒノカシ

氷野 檉

ジロウ

次郎

所属 葬儀社

身長 177cm

年齢 23歳

髪 黒 短髪

家族構成 ××××

ウオイド ××××

武器

スナイパーライフル

イーグル・アイ

眼鏡型の装備で、脳に刺激を与え活発に活動させ、視力、動体視力の上昇、目では見えない物の温度、風の流れが見える。

副作用は××××

性格

面倒見がよく冷静、しかし大人げない部分も

概要

葬儀社の最古参、何を考えているかよく分からず、なぜ葬儀社にいるのか、涯の下にいるのかは不明

狙撃の達人でイーグル・アイの補助なしで狙撃1.5kmまで可能でイーグル・アイの補助があると3kmまで射程距離が伸びる。

接近戦も出来るが達人級ではない

いのりに銃と接近戦のノウハウを教える

次郎の秘密兵器

秘密兵器1

「イーグル・アイ」

すごい眼鏡

秘密兵器2

「ワサビスプレー」

ワサビエキスを濃縮したスプレー、粘度があるから中々とれない、
イメージキャラ「ワサビ丸（次郎作）」が目印

秘密兵器3

「????????」

設定（後書き）

秘密兵器はどんどん増えます

第1話 葬儀社の男（前書き）

初投稿する次郎長と申しますものです。

投稿はゆっくりとしたペースになりますが、今後ともよろしくお願
いします。

第1話 葬儀社の男

葬儀社、日本の開放を目的に活動する武装組織である。

この組織のボスは恙神 涯（ツツガミ ガイ）一、ガイの言い分としては「自分達は常に淘汰される弱者を 送る 側である」とは言っていたが実際意味が分からない。

ついでに言っていると私、氷野 檉 次郎（ヒノカシ ジロウ）一がなぜ葬儀社にいるのかもよくわからない。

メンバーの制服も気に入らない、この服考えたのは一体誰だ？

文句を言いながらも一応葬儀社の一員として制服を着ているが・・・

いのりの着ている服だつて前がほとんど開いていて、見た感じとてもはしたない、私服のセンスは申し分ないのだが、葬儀社拠点であるのカッコはやめてほしい。

いい年した男どもがいるのだからあの恰好は毒だと思う。

そう考えていた私はいのりの服装を注意しようと思いついているのだがどこにもいない。

本部を数十分ほど探したところ、いのりがガイの部屋から出てきたところを発見した。

相変わらずの格好である。

「いのり」

「あ、次郎・・・何？」

「少し話がある、私の部屋まで来てくれ」

ちやうど例の服装をしているのでちやうどいい、柄ではないが少し説教をしなければ、

「分かった」

それだけ言い、私の部屋に向かいいのりはしっかりと後ろをついてくる、

それから少し歩き、私の部屋の前に到着する。

私の部屋のドアは声紋と指紋に認証されて開くので、私以外は誰も開けられないはずなのだが………
なぜか私の部屋で寝ている輩が3人いる。
しかもだ、部屋に置いてあるテーブルの上にはプリンが入っていたと思われる空の容器が大量に転がっていた。

寝ている輩の一人はツグミ、オペレーターの服装に身を包みのんきに爆睡中だ。

二人目は篠宮 綾瀬（シノミヤ アヤセ）一、アヤセは車いすに乗り食べかけのプリンを片手に持ちぐっすり寝ていた。食べている途中に意識が落ちたと考えられるな。

そして最後、アルゴだ。

アルゴが一番ひどい、アルゴはカーペットに寝そべり涎を垂らして部屋のカーペットを汚していた。

私は嫌な感じがしてすぐに冷蔵庫の中身を確認して愕然とした。

そう、大事に保存していた総数10個のプリンが全滅していたのである。

腹の底から煮えたぎるような怒りを冷静に抑え、冷蔵庫のミネラルドリンクを手に取り、500mlを一息に飲み干す。

「あの………次郎？どうしたの？」

いのりは私を困惑した表情で見つめる、

しかし私はそれを無視し、服装をいつもの黒いGパンとTシャツに着替える。

それからベッドの下に置いてある銀色のトランクケースとカバンを引っ張り出し、カバンの中に必要最低限必要な荷物を押し込めた。「あれ………？次郎さん………？どこに行くんですか？」

アヤセは物音で目が覚めたようだ、しかし周囲の状況は目が覚めたばかりで把握していないようだった。

「アヤセ、ガイに伝えておいてくれ………今、この時をもつて私は葬儀社を抜けさせてもらおうとな、それと部屋の物は全てアヤセの好きにしる」

私は葬儀社メンバーの証である制服をアヤセに投げた。

「え！？ちよつと待つて次郎さん！！」

アヤセは慌てて私を追おうとするが態勢を崩し転倒する。

「次郎………待つて！」

いのりは私の腕をつかみ引き留めようとする。

「………いのり」

私はいのりを見て頭をなでた。

「なんで………？葬儀社を抜けるって………」

「いのり、あの前がガバツと開けた服装はやめなさい、年頃の女の子なのだからはしたないぞ」

返事になっていない言葉を最後に私は一度、この葬儀社を去った。

数日後

ガイは途方に暮れていた。数日前に葬儀社の最古参である氷野榎

次郎が理由も告げずに葬儀社を去ってしまったからだ。

ガイはその場にいた、いのり、ツグミ、綾瀬、アルゴに氷野榎が去った理由を聞いたが全く分からなかった。

いのりに聞いてみれば部屋の三人を見たら血相を変えて荷物をまとめ出し、制止も聞かずに去ったと言い、部屋にいたツグミ、アヤセ、アルゴに聞いてみたところ、

アヤセは目が覚めたら氷野榎は出て行くところだったと証言し、ツグミ、アルゴは寝ていて分からないと言っていた。

とりあえずガイはツグミに氷野榎の行方を搜索してもらっているが、状況は芳しくない。

しかも明日は鍵を奪取する作戦の予定であり、作戦参加予定の氷野榎がいないと氷野榎の援護を当てにしていた作戦はかなり厳しいことになる。

しかもこれからの作戦にも響いてくることだろう、

こんな処でガイは、葬儀社は止まるわけにはいかないのだ、

「なにがあつたんだ………次郎」

ガイは一人暗い部屋の中でうなだれた。

第1話 葬儀社の男（後書き）

初めての作品です。

質問、意見、感想がありましたらよろしく願います。

第2話 元葬儀社の男（前書き）

短い時間で二人の方に感想をいただきました。

本当にありがとうございます。

なるべくすべての人に返信して行きたいと思っておりますので、感想、質問、誤字脱字の指摘等、お願いします。

第2話 元葬儀社の男

葬儀社を抜けてから3日間、私は旅館で静かな時間を過ごしていた。起きたくなったら起き、眠くなったら眠り、暇な時間は書店で買った本を読みふけ、旅館の運動場で汗を流し、名もなき男と卓球で火花を散らし、そして温泉に入る。

時たま老人たちと茶をともにしたり将棋を指したりした。ここでは時間がゆっくりと流れるようだった。

今日お茶を共にした御老人の夫婦は湯治に来ていたようで、ここは療養するのにちょうどいい場所だそうだ。

しかしずっとここに長居するわけにもいかない、長い時間同じ場所にとどまるとすぐにツグミに見つかってしまうからだ。

ツグミの本領はネットであり、この旅館は旅館で泊まった人間をほぼ全て紙媒体で管理しているために見つかる心配は少ないとはいえ、油断は全くできない。

同じ場所に留まるのは最高でも3日にしようと考えている。

そして今日がその3日目であり、名残惜しくもここを離れようと思う。

人が優しく、ご飯がおいしくて温泉があるなんて場所はなかなか見つからないのでここを去るのはひどく残念だ。

私はロビーに向かい受付にいた若旦那らしき人にチェックアウトする旨を伝える。

お金は前払いしていたので鍵を返すだけだ。

「はい、ありがとうございます、旅館のサイトにて登録を行い会員になられますと、特別に15%オフお値段を割引いたしますので、料金15%をお返しいたしますがどうなさいますか？」

「入ります」

即答して自前の携帯で、旅館のサイトに入り素早く会員登録を済ませる。

た。

「自分の性格が今回ばかりは仇となりましたか……」

私はカバンの中から黒いコートを出し羽織ると、道なりに走り出した。

「ガイ！！次郎の居場所を発見したわ！！」

ツグミは先ほど次郎が携帯の使用を確認し、ガイの元に報告に来た。ちょうど葬儀社のメンバーがほぼ集まり、明日の鍵奪還作戦について会議を行っている時であった。

「本当か！氷野樫はどこにいる？」

「街外れの森の中にある旅館からよ、旅館のサイトから会員登録したみたい」

ガイは顔に笑みを浮かべ自分の幸運を喜んだ。

あまり知られていない事実なのだが、氷野樫は儉約家で葬儀社の資産管理を任せていたので少しでもお金を浮かそうとする。

ガイは今回も氷野樫の性格に助けられた訳だ。

「六分儀はへりを出せ！！いのりとアルゴ、それに綾瀬はついてこい！！」

「ガイ！私も行くわ！」

ツグミは真剣な眼差しでガイを見た、ツグミはその場所にいた当事者だ。

少なからず責任を感じるのだろう。

「好きにしる、遅れるな」

ガイたちは足早にへりに急いだ。

他のメンバーたちは一刻も早く葬儀社の要、氷野樫の帰還を望んだ。

走ること数分、さすがに生身の体で、しかも重い荷物を持ちながらへりを振り切ることなどできない。

すでに追いつかれ、前にはへりとガイ、いのりに四分儀、後ろにはツグミ、アヤセ、アルゴがいる。

全員が俺を見つめている。少し気恥ずかしいですね。

いのりは今回ちゃんと葬儀社の制服みたいですね、関心関心。

それなのにツグミ、あなたの恰好はいただけません、オペレーターをする時の服を外で着ないようにとあれほど……いや、やめましょう。

先に口を開いたのはガイだった。

「氷野櫛、なぜ葬儀社を抜ける。俺たちを裏切る気か？」

ガイは私を睨めつける、相当怒っているのか肩を震わせてまでするようです。

「ふむ、別に私は裏切ったという感覚はありませんよ」

「じゃあ……なんで」

いのりは私を泣きそうな目で見る。その目は今のガイが私を見る目と少し似ている感じがします。

それにしても四分儀は相変わらずピクリとも表情が変化しませんね。怒っているのか、泣いているのか、それとも可笑しいのか、はつきりしてほしいものです。

「氷野櫛さん！！すいませんでした！！」

振り返るとアルゴが涙を流し頭を下げている。

アヤセとツグミはアルゴの姿を見て、釣られて頭を下げる。

「アルゴ？」

「すいませんでした……多分、俺たちが何かへマしたから氷野櫛さんは怒って葬儀社を……」

「みんな頭を上げてください」

私はそう言うとアルゴたちは顔を上げた。

「アルゴ、男が泣いていいのは親が死んだときだけです、それに……皆さんは何に対して私に謝っているのですか？」
四分儀以外の皆の顔が困惑した表情に変わる。

「えっと……私たちが部屋を汚したから……」
「アヤセ、私はその程度の事で怒りはしませんよ、もっと根本的なことです」

するとツグミはオズオズと発言する。

「もしかして、部屋を勝手に開けて入ったから？」

「それも違います」

「この間の訓練で……あまりいい結果じゃなかった……」

「いえ、いのりの訓練結果は素晴らしいものでしたよ」

皆は何のためにここにきたのでしょうか、これではヘリのガソリンと時間の無駄ですね。

もう少し私と言う人間を皆は知っていると thought なのですが残念です。

「氷野櫛、少しいいですか？」

「お、四分儀は私が怒っている理由が分かりましたか？」

とうとう期待のできる答えが来そうですね。

「これは信じたくありませんが……もしかして氷野櫛は我々葬儀社を見限ったのですか？」

嫌な空気が張り詰め、私はにやりと笑った。

そう、その答えこそ……

第2話 元葬儀社の男（後書き）

次回、氷野櫛 次郎が怒っている理由がわかります。

次回の投稿は未定ですが、皆さんは氷野櫛 次郎が怒っている理由
はわかったと思います。

感想の部分に怒っている理由を投稿してくださいますと、 をもれ
なくプレゼントいたします。

それではまたの機会に

第3話 裏切りか否か（前書き）

今回は表現が曖昧な部分が多々ございます。

感想、質問、誤字脱字、ご指摘等がございましたら感想欄にお願いいたします。

それと、2話の序盤部分に表現ミスがあるとご指摘いただいたので、書き直しておきました。

ご指摘してくださった零華さま、ありがとうございます。

第3話 裏切りか否か

「これは信じたくありませんが……もしかして氷野櫛は我々葬儀社を見限ったのですか？」

私は四分儀の質問を聞いてニヤリと笑う。

そう来たかと意表を突かれた気持ちでいっばいだ。

「次郎……本当なの？」

ツグミも私の表情を見て聞いてくる。

「……そう、その答えこそ……私が一番聞きたくない答えでしたよ、四分儀」

私は笑っていますがこれはきつと、色々な感情が交錯した結果なのでしよう。

今は表面上笑ってはいますが、うれしいとも、楽しいのも、可笑しいとも思っていないのですから。

「ガイ、今思うと葬儀社を抜ける時の私の怒りは非常につまらないものです。だってその時私が怒った理由はプリンを全て食べられたからですよ」

「は？」

その時ガイは非常に面白い顔をしました。クールな彼がめつたに見せない表情ですね。

他の皆も似たような表情をしています。

「じゃあ次郎はプリン程度の事で葬儀社を抜けるほど怒ったっていうの!？」

「はい、ツグミの言う通りです。私だって一人の人間ですし理不尽なことで怒りを感じ、その怒りで冷静さを失うこともあります。あの時の私は大人げなかったと後悔と反省はしていますが……」

私の行為は組織の人間としてはやってはいけない事の一つです。組織で地位の高い人間が怒りのあまり周囲が見えなくなり、どこかに

消えてしまっ。

これは子供の我儘以上に酷いものです。

「結局次郎さんは葬儀社に帰ってくれるんですか？」

アヤセは直球の質問を私に投げかける。実際このままのらりくらりと交わしたかった。

しかし先延ばしするのはあまり良くないことだ。

「そうですね………戻りたい気持ちはありますが、今は無理です」

よくない事だが、今は先延ばしにする以外の手はない。

私はコートの中に手を入れる。

「まずい！！誰か氷野櫛を止める！！」

ガイは気づいたようです。

まあ、理由もなく私が暑い中コートを着る理由なんてそうそうありませんね。

皆がガイの指示に一瞬遅れて反応した瞬間、私は服の中からスモーク弾の（・）形を（・）した（・）閃光弾2つとスモーク弾を8つ取りだした。

閃光弾はピンを抜き後方と前方に投擲、同時にスモーク弾を四方八方に投げる。

直後、辺りには凄まじい音と閃光、そして煙が立ち込める。

皆の感覚、聴覚、視覚を封じ逃走を図る。目立つコートは素早く脱ぎその場に放棄、銀のトランクケースとカバンを持ち逃走を開始した。

山の中に逃げ込み、ついでにもう一個閃光弾を投擲しておく、現在の私の耳と目の半分は見えず聞こえはしないがそれで十分、この程度の山なら走破は可能です。

私は仲間たちに心の中で詫びつつ街へ向かった。

その頃ガイたちは煙幕の中で混乱していた。

勿論ガイたちは素人ではなく、むしろ重火器のエキスパートなので、煙幕程度では混乱などしない、しかし氷野樫の手が悪質すぎたのだ。最初に氷野樫が投げたスモーク弾は、見た目は葬儀社のメンバーがいつも使っているスモーク弾だった、それを見たら誰もが煙幕を使い逃亡しようとするだろう。

しかし、それが凄まじい閃光と音を辺りにまき散らしたというのなら誰でも度肝を抜かれるだろう。

しかも最後に状況確認をしている所に止めの閃光弾、ガイたちが状況確認できるのはこれから15分たってからの事だった。

「うう………次郎め、悪質な手をお………」

ツグミは目を擦りながら氷野樫に対し悪態をつく。

他の皆も似たような行動をして、まだ動けそうになく煙幕には催涙効果もあつたようだ。

「これより葬儀社本部に帰還する、へりに乗り込め」

ガイは目を赤くしながらへりに乗り込んだ。

「待ってくれガイ！氷野樫さんは探さなくていいのかよ！？」

「どうやってだ？氷野樫はすでに山の奥深くに逃げ込んでいるだろう、このへりで追いかけてようにもどこに逃げたか見当がつかん、ガソリンと時間の無駄だ」

「素晴らしい判断、さすがですガイ」

そう言つて四分儀もへりに乗り込む、今の言葉には若干の皮肉が交じっていた気がしたが、あまり気にしてはいけない。

「しょうがないわよアルゴ、よく考えたら私たちが次郎を捕まえられるわけじゃないじゃない、足で追つてもへりで追つても無駄よ、無駄」ツグミも早々に諦めてしまったようだ。アヤセも納得はしていないようだ、ガイの命令ならば仕方ないと思つたのか、黙つてへりに乗り込む。

「いのり、お前はいいのかよ！？」

しかしアルゴは諦めきれないようで、いのりの賛同を得ようとする。「次郎は……」『今は無理』って言った、だから待つ」いのりもそれだけ言うとはりに乗る。

残るはアルゴだが、いのりの言葉に何も言い返せずにへりに乗った。だが、葬儀社本部に帰還し氷野樫が戻らないという事は、鍵奪還作戦の要が一人減るといふ事、これからガイたちはどうするのか……

次の日

まだ日の登り切ってはいない時間帯、私は未だに寢床を決められずにいました。

葬儀社本部から一番近い街のほうが意外に見つからず、『灯台下暮らし』と言うものではないかと考えでありましたが、電子機器をほぼ使かっていない宿泊施設がみつからなかったのです。山奥の旅館のように紙媒体での客の管理と言う非効率的なホテルなどあるわけもなく、なんと一晩公園のベンチで夜を明かす羽目になってしまいました。

よく職務質問されなかったと、自分の幸運を喜びはしましたが一人寂しく公園で過ごす夜は精神的に寒々しく、いっそのこと葬儀社に戻っても、などと考える始末でした。

「そろそろ腰の落ち着ける場所は……」

周りを見回すと橋の先に古びた建物を発見した。近づいてみると今は使われていない大学の施設のようで、人の気配はなさそうです。

「おじゃまします」

誰に言っているのか分からない挨拶を口走り建物に入る。建物内はコケや緑に多少覆われていますが当分の生活は問題なさそうです。

少し探索してみるとしましょう。昔はこういう場所を見ると秘密基地だ何だと心が躍った物ですが……どうやら先客がいたようですな。

部屋の壁際にはパソコンと段ボールが積まれており、誰かがここを使用しているようです。

本来ならば早々に退散すべきなのですが、少し興味が湧いてしまいました。

パソコンに近づき触れてみます。

「ほお………」

画面が映り、鳥が飛び立つ風景が再生されています。

とても美しく心安らぐものを感じますね。

「どれどれ………ほかに映像は………」

色々と操作してみると、この映像は作り掛けのようです。この映像の完成は楽しみですが残念ながらその暇はなさそうですな。

外に人の気配がしました。この建物は出口が一つしかなく恐らく窓ははめ込み式、身を隠すほうが最善ですな。

私は面倒を起こさないためにも、荷物を抱え電源盤の前にある段ボール箱に身を隠した。

第3話 裏切りか否か（後書き）

主人公の設定を見たいという方がおりましたら、設定資料を掲載し
ようと思っております。

ご覧になりたい方は感想欄までお願いします。

第4話 少年との出会い（前書き）

皆様のおかげで40000アクセスを超え、57人もの方がお気に入り登録してくださいました。
本当にありがとうございます。

第4話 少年との出会い

段ボールの中はカビ臭く埃っぽく、長い間放置されていたからでしょうかね。

大事な服が汚れてしまいました、もう少しいい隠れ場所があればよかったのですが、緊急事態ですし贅沢は言えません。

そして聞こえてきたのは誰かが足を引きずる音と………機械の駆動音？

どこかで聞いたような………

私は建物の中に入ってきた人物を見て驚きました。

赤い金魚のような服を着て、あの前がガバツと開いた服を着た少女、いのりが腕を怪我して入ってきたからです。

後からふゆーねるも入ってきますが、足が壊れているようですね。

一応私は救急道具を携帯していますので、今出て行って助けてあげない事もないのですが、今いのりの前に姿を現すとガイたちに連絡を取られてしまう可能性もあります。

これは悩みどころです、あの程度の怪我ならいのりでも大丈夫かもしれないませんが………

その時です。私の目の前でとても困ったことが起きてしまいました。なんと、いのりが服の上部分を脱いでしまったのです。

誰もいない建物だからといってそれはまずいのではないのでしょうか？ しかもいのりのはのんきに歌を歌い始めてしまいました。困った物です。

まあいいでしょう、ですが再びの危機のようです、誰かがこの建物の中に入ってきたようです。

足音は一つですがいのりは気づいていないようですね。

「しようがないですね………」

無意識に私はそう呟くと、カバンの中からハンドガンを取り出し残弾数を確認。

一人ぐらいなら問題ありませんね。

私はハンドガンを構え、すぐに撃てるように準備をしました。しかし入ってきたのは少し予想外な人物でした。

多分普通の学生でしょうか？弁当箱を思しき物を片手にいのりの姿に驚きつつ近づいていきます。

思春期の少年なら仕方がないとは思いますが、半裸の少女を見つめるのは失礼かとおもいます。人の事は言えませんが……少年は足元に注意が言っていないようで、足元にある空き缶に気づかず蹴とばしてしまい、辺りには大きな音が鳴り響きます。いのりは素早く反応し素早く前を隠すと、ふゅーねるは少年の足に紐を射出し足元をすくいました。

「うわぁっ!?!」

少年は見事に転倒し、弁当箱の中身をぶちまけていますが、この反応からするにG・H・Qの人間ではなさそうです、少し安心しました。

「あ!?!あの……!?!違って!?!そんなつもり全然なくて!?!」

何が言いたいのか全く分かりませんが、少年の弁解もむなしく、いのりも警戒心をまったく解いていません。

少年は弁当を拾うと、再びいのりに近づきます。

「君もしかして!?!」

いのりが後ずさりして机にぶつかると、その衝撃でPCが起動してしまったようです。

私が見たあの映像が流れていますね。

半分予想が出来ていましたが少年がここの先客のようです。

「ま、まだ途中なんだよ! 僕の故郷の景色」

「綺麗」

「え……?」

これが青春の1ページと言う物でしょうか? 傍から見ると悪くはない雰囲気だとは思いますが

くう~~~~~

いのりのお腹は色々な意味で自重すべきです。

さすがのいのりも恥ずかしそうに顔を赤らめますが、少年は優しくおにぎりを進めているようです。私もお腹が空きました。

15分後

二階？に移動したいのりと少年は、何か話しているようですが何を話しているのか聞こえにくいですし、私の一からでは見えにくいです。

一体何をしているのか気にはなりますが………また誰か来たようです。

それも大勢、10何人の単位でしょうか？

私気付いた数秒後に大量のGHQの兵隊たちがなだれ込んできました。

しかも一人階級の高そうな禿げ……ではなく、サングラスをかけたスキンヘッドのおじさんもいますね。

いのりはすぐさま逃げようと思いますが、残念ながら腕を掴まれてしまいました。

しかも兵士はいのりに銃身で打撃を与えます。

「学生か？」

「は、はい！あの……その子怪我してるんです、出来れば」

「この女は犯罪者だ、庇うなら君も同罪として浄化処分するぞ？」

近くにいた兵士二人は少年に銃を向けます、相変わらずGHQは腐つていますね、さすがに私も限界がありますよ………

「データ照合の結果は……？」

「六本木の葬儀社の一員に間違いません」

「ふっ……テロリスト風情が!!」

ハゲはいのりの顔をけり上げ、部下に連行するように指示すると、引き上げていきました。

あの男はあとで報復させていただきましよう、顔も覚えましたが……

「こんな俺でいいのか……」

情けないことに暴力の危険から解放されて、少しホッとしていた。その程度だ、僕は。

所詮彼女を相手にできる格じゃなかった。

僕はあやとりで「取って?」と言った彼女を思いだし、涙を流した。取りたかった、あの子に近づいて手を触れたかったよ。

だけれども、もう忘れよう……しばらく休めば心が回復する。

そしたらまた……いつもの僕に戻ろう。

そう思った時だった。

「少年!いのりを助けたいですか?」

突如声が聞こえ下を見ると、段ボールに埋もれた男が銃を片手にこちらを見ていた。

その男の髪の毛や、白いTシャツ、黒いズボンは埃で汚れていて、風体はまるで浮浪者だった。

「あなた誰ですか!？」

「私ですか?通りすがりのスナイパーですよ」

明らかに怪しい、絶対に関わってはいけない人種だ。

「こ、答えになっていません!」

「それもそうですね、私は……ひとまずアイスマンとお呼びください」

「アイス……マン？」

絶対に偽名だ。

「そうですね、あなたは……？」

「桜満 集です、桜が満ちて集まると書いて桜満 集」

「シユウ……いい名前です、では再度問います、あなたはいのりを助けたいですか？」

「当たり前ですよ！！でも……力がありません……」

「では、私が手を貸しましょう、条件付きで」

何を言っているんだこの人は？さっきまで隠れていたくせにいのりを助ける？

僕を馬鹿にしているのか？

「ふざけないください……じゃあ何で隠れていないでいのりを助けなかつたんですか！？」

「その時ではないからですよ、そして今がその時です」

本当にふざけた奴だ、でも……見捨てたくない……

僕の決断は

第4話 少年との出会い（後書き）

集の会話を敬語に変えました。

誤字脱字、悪い点、良い点、ご感想よろしくお願いします。

第5話 集の決断（前書き）

皆様のおかげで6000アクセスを超えました。
読んでくださった方、本当にありがとうございます。

第5話 集の決断

「本当にいのりを助けることが出来るんですね？」

「ええ、条件は呑んでいただきますが」

私の言葉を聞いたシユウは気難しい顔をしてこちらを見る。

「条件って……お金ですか？」

「そんなのいりませんよ、これでも生活に困らないくらいのお金はありますし」

シユウは一体私をどんな人間に見えていたのでしょうか？

「条件は三つです、一つは私について詳しく詮索なこと、二つ目はこの場所を私の寢床として貸していただくこと、三つ目は三食暖かい食事を私に提供することです、おいしい物をお願いしますね」

「え？そんなのでいいんですか？」

シユウは呆けた顔をしてこちらを見る。とても面白い顔をしていませんね、写真に撮っているのりに見せて上げたぐらいです。

「もっと大変な条件のほうが良かったですか？それなら三食デザートをつけて頂きましょう」

「いえいえ！！それで十分です！！」

本当にこの子は面白いですね、昔の自分を思い起こします。

この子は私と違う人間にはなるでしょうが……

「では早速いのりを助ける下準備をしましょう、まずシユウはこの場所に行ってください、ふゅーねる」

私が呼ぶとノロノロと壊れた足で、足元にやってくる。

「このロボット……いのりが持っていた……」

「この子の名前はふゅーねる、ロボットですが感情は豊かですよ」
そう言っただけふゅーねるを持ち上げ、中に入っている例の物を取り出す。

「えっと……アイスマン？さんは何でロボットの事を……」

「シユウ、詮索は禁止です」

「すいません……」

シユウは少し疑惑を感じたような顔をする、まあしようがないですね。

私なんて夜歩いていたら即通報されそうな格好ですし。

「構いませんよ、時期が来たらお話ししよう、ふゅーねる、地図を出して下さい」

そう言うと、ふゅーねるは六本木周辺の地図を写し出した。

「ではこの場所に向かってください、それとこれは肌身離さず持つように」

私はシユウにふゅーねるを手渡し、胸ポケットに遺伝子兵器？を入れた。

「これは？」

「シユウがいのりを救う切り札になりうるものです」

私の言葉を聞いてシユウの顔は引き締まり、責任感を帯びた顔つきに変化した。

立派な男の顔ですね。

「じゃあアイスマンさん、行きましょう」

「いえ私は準備がありますので、先に行ってください、何かありましたらこちらの端末に連絡を入れますので、耳に付けておいてください、ピンチになったら助けますよ」

そう言って、私の数少ない持ち物である耳に装着するタイプの通信機器をふゅーねるの中に入れた。

「ありがとうございます、じゃあ行ってきます」

そう言うとシユウは六本木に向かった。

私は彼の未来を大きく変えてしまったかもしれない、今さらになりそう感じた。

もし私が彼の背中を押さなかったら普通の生活を送っていただろう。

「まあ、今更後悔してもしょうがないですね、なるようになるでしょう」

私は後悔をなるべくしない主義なので……
これから後悔しないためにも、下準備は入念にしないとイケません
ね、
ポケットから携帯電話を取り出しある人物に電話をかける。
「もしもし？ ジョンですか？ お久しぶりです、今から私の私物を取り
りに行くので準備してもらえますか？ ええ、『イーグル・アイ』も
……」

僕は今ピンチだった、一応アイスマンさんに貰った通信機器を耳に
付けているけど全然連絡がなく、地図のとおり歩いていたら異様
に治安の悪そうな場所を通るし、怖い人たちが僕を見ている。
それにとうとう絡まれてしまった。

「おいお前」

「あ、はい……」

スキンヘッドの男の人が近づいてくる、ほかに男の人が近くに3
人もいるけど多分グルだと思われる。

「それ食べんの」

「え、何ですか？」

「それ飯？ 食べんの？」

「え、ああ……それはないと思いますけど……多分
一気に顔が近づくと、正直本当に怖い。」

「置いてけよ」

「いや無理なんですよ」

殴られた、それも前置きもなしにいきなり、鼻血も出てきて相当痛
い。

アイスマンさんは一体どこにいるんだ！？

ピンチになったら助けてくれるって言ったのに！！

「お前なめてんの？ いいからそれ寄越せよ」

ダメだ、絶対に渡せない！

「ごめんさい！預かり物なんで、あの子が必死に守ろうとしてた、だから……すいません！！」

この言葉を言ったら殴られる、心の中でそう思いつつ、次の拳が来るのを待つ、

その瞬間だった、辺りが光で照らされた。

「ああ？」

ライトの光を背に一人の人物が現れた、台座のような場所に立ち金髪を風に靡かせ、黒い服に身を纏っている。

「やあ死人の諸君」

「ああ？死人だと？」

スキントドは反応し凄みを効かせる。

「ああ、今この状況は君たちの生存を許さない」

そう言つて、僕たちの近くに飛び降りてきた、顔を見たが多分男だろうと推測される。

「故に、君たちは死んでいる」

言い回しは少し分かりにくい、これは明らかに挑発行為だ。

周りの男たちは怒りに駆られると思ったけど、全然違う反応だった。

「あいつまさか……」

「ガイ？」

男たちの言葉を察するに、畏怖の念か何かを感じた。

「勇気あんな、オメエ……アアツ！？」

スキンヘッドはポケットからナイフを取り出し、刺し貫こうと振りかぶる。

しかし、金髪の男ガイはナイフを持った腕を掴むと引き寄せ、腕の関節に打撃を与え、腕を捻る上げた。この間約8秒、最後に階段の下に突き落とした。

他の男たちも自棄になり襲い掛かるが、ことごとく反撃されてしまった。

男たちは悲鳴を上げて逃げて行った。

危機から脱出できた安堵感を感じていると、今度は目の前に女の子が現れた。

「うわあ!?!?.....ってあれ?」

頭に動物の耳のような機械を取り付けて、全身を体のラインが浮き出るスーツを着ている。

「それふゆーねるでしょ?返して!」

女の子は強引にロボットを取ろうとするが、僕は本能的に抵抗した。

「駄目だ!?!これは預かった物だ!?!」

「何それ!?!ふゆーねるは私の物よ!?!」

再び取り合いになる。

「駄目だつて!?!これはアイスマンって人から預かったんだ!?!」

「アイスマン?誰よそれ」

そう言われて僕は返答に困る、僕もあの人が誰だかよく分からない。

「えつと.....髪が黒くて短くて薄汚れた白いTシャツに黒

いズボンで確か

「そんなことどうでもいいわ!?!」

「あ.....」

不意を突かれロボットを持っていかれてしまった。

ああ.....アイスマンさんになんて言えば.....

落胆していたところに、金髪の男が話しかけてきた。

「桜満 集か?」

金髪の男が近づき一瞬の沈黙。

「アレと一緒にいた女はどうした?」

「それは.....その.....」

その質問に僕は答えられずない、何をどう弁解しようと僕はいのりを助けることが出来なかったのだから。

「見捨てたのか?」

「くっ.....!」

始めてあった人間に見透かされた、その通りだ.....

ドンッ！！

その瞬間、遠くで爆発らしきものがあり火の手が上がった。

「ガイ！GHQの白服どもが街に入り込んで来てます！」

フードをかぶった男が今の状況を報告に来た、やっぱりあれは爆発？

「また………GHQ」

火の手が上がる街を見て僕は、何も出来なかった自分を思い出した。

第5話 集の決断（後書き）

誤字脱字の指摘、感想、質問、良い点悪い点がございましたらよろしく願います。

第6話 スナイパーの仕事（前書き）

今回は少しグロテスクな内容があります、
お気をつけてお読みください。

皆様のおかげで9000アクセスを超えました。
本当にありがとうございます。

第6話 スナイパーの仕事

俺たちGHQが属する部隊は現在、六本木に来ている。

仕事は葬儀社と六本木に住んでいる人間の駆除、すでに作戦開始されており辺りには火の手が回り、猥雑な町並みは瓦礫を化している。実をいうと人間を撃つことには何も躊躇いはない。引き金を引く相手が訓練用的から人間に変わったただけの事だ。

本当はこの作戦にあまり乗り気ではない、本音を言うならば無抵抗の人間を撃ちたくない、しかし仕事ならば別だ。

俺には守るべき妻と娘、そして同僚と自分がいる、すでにここは戦場なんだ。

他の事に構っている暇はない。

俺は今、二人一組で作戦に望んでいるのだが、実は俺のペアは正規のペアではなく、即興で選ばれたのだった。

しかも相手はいけすかない上司、本当に踏んだり蹴ったりだ。

「おい急げノロマ、お前のせいで本隊とはぐれてしまっただろうが」
そしてこの毒舌、自分のミスを人のせいにしやがる。

「すいません……」

残念ながら謝るすべしかない俺は下げたくない頭を下げる。

俺の上司は俺の謝罪が気に食わないのかボソボソと小言を言い始めるが気にしない、一々取り合っていたら胃に穴が開く。

本隊に合流しようと数分間歩くと、少し広い道に出た、瓦礫で歩きにくかったが広い場所に出ればこちらの物だ。

俺は上司を追い抜かしさつさと行くこうとする。その時だった。

「危ねえ!!!」

上司に首筋を掴まれ後ろに引き倒される、その瞬間ミサイルが飛んできて俺が通ろうとしていた場所が爆散した。

「な!?!」

もしも歩いていたら俺の体はミンチになっていただろう。

「近くのエンドレイヴがミサイルをぶっ放しやがった、エンドレイヴのパイロットは俺たち歩兵の事なんて気にしやがらねえ、よく覚えておけ」

それだけ言うと上司は先に進んでいった。

あの偏屈上司が俺を助けた？ 一体何の冗談だって言うんだ……

だが、俺だって礼儀の一つや二つは心得ている、一応礼ぐらいはしないとな。

「あ………命を助けて頂き

ムゲツ!？」

「静かにしろ」

上司は俺の口に手を当て指さす。

上司の指方向には学生服姿の少年が走っていた。

「お前はあのガキを撃て、俺はあの派手な女を狙う」

「なっ!？ あんたは一体何を言っているんだ!！ ガキと女の子を撃つなんて胸糞悪いこと

「黙れ、俺たちの任務を言ってみろ」

上司は冷たく俺に言い放った。

「上からの命令はこの辺りの屑どもを駆除すること、それが出来ないなら先にお前を撃つ」

上司の目は冷たい機械のような目だった、任務のためならなんでもする、俺を殺すなんて何とも思っちゃいない、そんな人間だ。

「でも………」

「気持ちわかる、だが仕事はこなせ、それがGHQだ」

そう言うと上司は物陰に頭だけ出し標準を定めた、これ以上何もいう事はないということだろう。

俺は心の中で何か吹っ切れ、少年に標準を定める。

何かがおかしくなってしまったんだろう、俺を可笑しくしたのかこの場の雰囲気か、それとも上司か、はたまたさっきのミサイルの爆発か。

「先に撃つ」

上司は短くそう言った、俺も目の前のターゲットに集中し引き金を引こうとした。

その瞬間だった、周りが火で赤く染まっていた風景がもつと赤く染まった。

ベチャリともグシャリとも判別が付かないような音がした。

振り返るとそこには下顎から上がない変わり果てた上司の姿があった。

「は……」

辺りに脳みそを思わしきピンク色の物体がぶちまけられ、俺の顔にも付着している。

状況が全く理解できない、しかし確実に死んでいる。

さっきまでそこで喋り、俺の命を助けてくれた名も知れぬ上司、そんな事を考えていると遠くのビルの上で何かが光った、目を向けたその時、二度目のベチャリともグシャリとも判別できない音が一番近くで聞こえ意識が飛んだ。

「もしかしてあの男……私に気づきましたかねえ？」

私は凄惨な死体が二つ出来た場所から、だいたい1kmほど離れたビルの10階にいる。

ここには爆発があつてからすぐに付きましたが、少し出遅れた感が否めません。

この場所からスナイパーライフルで狙い打つたのに気付く訳がありませんが、もし気づいたのなら相当カンの言い方ですね。

煙で視界が悪く、この状況下で察知するのは並大抵の事ではありません。

まあ死んでしまったので関係ありませんけど……

「そういえばシュウに連絡をしておいたほうが良いでしょうか？」

応命の危機があったことを言っておくべきでしょうか？」

そう考えた矢先だった、シュウの後ろにはまた3人ほど兵士が現れた。

シュウはいのりに目がいついてしまったく気づいていないようだった。

「世話が焼けますね……」

再びスナイパーライフルを構え、照準器で狙いを付け引き金を引く。この距離であればスポッターは不要であり、オートマチックタイプ（自動装填）のライフルなので連射可能、兵士を一掃できます。この様子ですと秘密兵器は必要なかったみたいですね……

周囲を気にしつつ、シュウといのりの様子を窺う、近くには兵士はいないので一先ず安心、そう思った矢先、いのりの進行方向に2体のエンドレイヴを確認した。

まずい！！

私は急いで強制回線を使いシュウに連絡を入れる。

「シュウ！！いのりを止めなさい！！」

「え！？アイスマンさん一体どこに！？」

シュウは急に入った連絡に驚きを隠せないようだった。

「そんな事は後です！！いのりを止めなさい！！」

私は叫ぶ、しかし遅かった。

2体のエンドレイヴはいのりに気づき大型の銃をいのりに向ける。

私は無駄だと思いつつも、虎の子である秘密兵器、『イーグル・

アイ』を装備する。

装備といつてもただ眼鏡型の装置を眼鏡と同じように装着するだけです、効果は絶大。

視力を大幅に上げ、目では視認できない物の体温、風の動きを感知する。

そしてこのイーグル・アイの本領でもある動体視力の大幅な上昇、ですがこんな物を使ってもエンドレイヴの破壊は不可能です。

しかし、少しでも時間稼ぎになれば……
そう思い、エンドレイヴの装甲が薄そうな関節部分を狙い、引き金を引き続ける。

私は今心底後悔しています、ジャックにはイーグルアイではなく対戦車ライフルを用意していただくべきでした。

こちらから見るに、シュウは全力で走りいのりの元に走っています。
「つく！！間に合え……」

ライフルを持つ手が汗で濡れ、震えが止まりません。

あと少し……あと少し……

シュウがいのりの元にたどり着き抱きとめる、その瞬間、エンドレイヴは今にでも引き金を引きそうになった。

二人は死んだ、そう心の片隅で感じたその瞬間、シュウといのりの周りに火の粉とは違う赤い小さな光が飛んだ。

それだけではない、シュウの足元には光の陣のようなものが発行し、水銀のような銀色の謎の物質が辺りを揺らめきました。

「あれはまさか……」

シュウはいのりの胸に腕を差し込み、細長い水晶の塊のような物を取り出すと、中から剣のようなものが現れた。

「王の……能力」

空は開け光、見る物の心を奪う美しさを持っていた。

私とその光に目を奪われていると、エンドレイヴは後退しミサイルを射出した。

シュウは剣を突きだすと陣が出現し、ミサイルを反らす。

次の瞬間、シュウは走り出すと剣を使い、エンドレイヴの腕を切り落とした。

すさまじい戦闘力、今頃フィールドバックを受けた人間と他の技術者たちはこの異常な事態に驚いている事でしょう。

さすがの私もここにいると巻き添えを食らってしまいそうで恐ろしいです。

私はイーグル・アイを外し、ポケットにしまうとライフルの弾装を

抜きカバンにしまっ。

急いでビルを階段を駆け下りシュウとエンドレイヴの戦闘を1分ほど見つめる。

シュウはエンドレイヴのミサイルを避け、切り裂き、そして吹き飛ばす。

かなり善戦しているようなので私の手助けは必要なさそうですね。

私はシュウに背を向け歩きだす、そろそろ帰ってもいいかもれませんね。

我が家に……………

第6話 スナイパーの仕事（後書き）

そろそろ次郎の家出が終わり、次郎の消えた真の理由が明かされます。

ちなみに真の理由は後付け設定です。

それとご要望がありませんでしたが、次郎の設定をのせておきます。感想、誤字脱字の指摘、悪い点がございましたらよろしくお願いします。

第7話 次郎の真意（前書き）

遅くなりましたが投稿します。
今回はほぼ会話です。

第7話 次郎の真意

「ガイ、私ちゃんとできた？」

赤く、前が開いた服を着た少女、いのりは心配そうにガイに問いかけた。

「いや、お前には失望した、いのり」

しかしながら、金髪の青年ガイはいのりに厳しい言葉を言い放つ。いのりはその言葉にハッと息をのみ、悲しげな表情を見せる。

その状況を見るに見かねた少年、幸の薄そうなシュウはガイに話しかける。

「あの、酷いんじゃないんですか？口挟むのもなんですけど・・・

・ ・ ・彼女！すごく頑張ってた！酷いけがまでして・・・」

「知っている」

だが、ガイはシュウの言葉に冷たく返す。

「結果がすべてだ、あいつは最後に大きなへマをした」

「へマ・・・？一体何を？」

「お前にヴォイドゲノムを使わせた事だ」

その言葉にシュウは覚えがあつた。

「あのシリンダー・・・アイスマンさんから預かった・・・

」

「あれは本来、俺が使はずの物だった・・・」

ガイの言葉にシュウは驚きを隠せなかつた。

シュウはあのシリンダーはアイスマンの物だと思っていたからだ、アイスマンはいのりを助ける切り札と言っていたために、つい使ってしまったが・・・

「お前に預けたシリンダーはセフィラゲノミクスが三機のみ培養に成功した強化ゲノムだった、使用者に付与される力は王の能力」

「王の能力・・・」

「ヒトゲノムのイントロンコードを解析し、そのうちに隠された力

をヴオイドに変えて引き出す事が出来る」

「ヴオイドって……?」

「形相を獲得したイデア、お前が使ったあの剣の事だ」

シユウは、いのりから取り出した武器をふと思い出した。

凄まじい能力を扱う兵器、シユウはそれに恐怖感を感じた。

「あれはいのりのヴオイド、別の人間からはまた別のヴオイドが引き出せる、神の領域を暴くヴオイドテクノロジーの頂点、それがお前の手にしたものだ」

「え?」

「もう昨日までのお前のように、無力に立ち止まり見過ごすことは許されない、お前にも戦ってもらおう」

「そんな!!いきなり……」

その言葉を言った瞬間、ガイはシユウに近寄ってくる。

シユウは本能的にのけ反る、何をされるか分かったのだろう。

ガイがシユウの首下を掴もうとした瞬間だった、ガイのその手は何者かに弾かれた。

「ガイ、その嫉妬は情けないですよ、まるでおもちゃを横取りされた子供のようですよ」

その男は銀のトランクケースを片手に、黒いズボンとワイシャツを汚して浮浪者の服装で現れた、唯一浮浪者でないという決め手は背中に担いだスナイパーライフルであろう。

「アイスマンさん!？」

「なっ!?!氷野樫!!」

「ジロウ……」

三人は一人の人間をすべて別の名前と呼んだ。

「みなさんお揃いで楽しそうですね」

氷野樫はニコリと笑うが場の空気は一気に凍りついた。

おかしいですね、笑顔でやってきたというのに場が凍りつくとはどういう事でしょう？

「アイスマンさん！一体どこに行っていたんだですか！ピンチになったら助けてくれるって言ったじゃないですか！」

「勿論助けましたよ、命がけの援護をしましたが気が付きませんでしたか？」

自分の場所が知られてしまう事にも厭わずに、エンドレイヴに銃弾を叩きこんだ私を褒めて欲しかったぐらいです。

「そうなんですか・・・？」

「ええ、ビルからこそそと撃っていましたよ、勿論シュウの有志もすっかりと見させていただきました」

「あのありがとうございます」

「氷野樫！お前は一体どういつつもりだ！！」

「ガイは私の首下を掴み叫ぶ。」

「数少ない服が伸びてしまうので話してほしいのですが・・・」

「そんな事はどうでもいい、お前の本心を今！！ここで言え！！」

「ガイはなぜ熱くなっているのでしょうか？いえ、これは熱くなるというより焦りでしょうか、大事なヴォイドゲノムがシュウに使われ、てしまい困っているのでしょうか。」

「私の本心なんてガイが知ってどうするのですか？」

「次郎！！貴様！！」

「ガイは堪忍袋の緒が切れたと言わんばかりに拳を振るおうとしますが、しかしそれは叶いません、ただ殴られるのは癪ですしね。」

「ガイ、今のあなたに私は負けません」

「第一にこの近距離で大ぶりのパンチが当たるのは2流がいいところですよ。」

「やっぱり相当頭に来ているんですね。」

「私はガイの右手をいなすと、ガイの体に脇を密着させた。」

「なっ!?!」

ガイは驚きの声を上げますが、私が何をしようとしているのかすぐに分かったでしょう。

そう、投げ技です。

「そお~~~~れっ!」

背負い投げをして、地面に叩きつける様に落とす。

投げ技は地面が固ければ固いほど効果が増しますから、床がコンクリートのこの場所でやれば相当痛いでしょう、骨の一本ぐらいはヒビが入りましたかね?

「あの……アイスマンさん? 氷野樫とか次郎とか呼ばれていますけど……お知り合いですか?」

シユウは状況が掴めないように私に質問してくる。

しかしその問いに答えたのは私ではなくいのりでした。

「その人は氷野樫 次郎、私たち葬儀社のメンバー」

「え……?」

酷く驚いた表情をするシユウ。私としては、ネタばれは遅いほうが良かったのですが。

「いのり、一つ訂正させてください、元葬儀社です」

「そんな事はどうでもいい! なぜ桜満 集にヴォイドゲノムを預けた!?!」

ガイは私を振り払い立ち上がり、怒りを露わにする。

「この世の全て物はあるべき場所に収まるべきです、何も問題はありませんよ」

ガイは私の言葉に何も言い返さない、そして多少の間を経て何か言おうと口を開こうとした時だった。

ピピピピピと言う乾いた機械音が辺りに響いた、恐らくガイの端末が発している音でしょう。

「あの……鳴ってますよ?」

シユウは恐る恐るガイに話しかける。

「チツ……分かつている」

それだけ言つとガイは端末の通信をオンにした。

「ヤベエ事になったぞガイ、14区画の地下駐車場に白服どもが突入しやがった」

おや、この声はアルゴのようですが、地下駐車場に白服が突入とは一体……

「地下駐車場？」

「誰かが安全だつて言いだして、避難していた100人近くが一気に捕まっちゃまった、それにアヤセを食った奴は皆殺しのダリルだ、ちよつとめんどくせえぞ」

ダリルですか……確か金髪の坊やだった気がしますね、姿はあまり見た事ありませんが親の権力を笠にきて好き放題やっているとか……

「ダリル……あの万華鏡か」

ガイは不敵な笑みを浮かべた。

「最近よく聞く名前ですね、ガイ、あなたはどうしますか？」

私がガイに話しかけると、通信中の相手、アルゴにも聞こえていたようだった。

「氷野櫂さん！？戻ってきたんですか！！」

「いえ、まだ帰るつもりはありません」

それだけ言つと私は通信を無理やり切った。

「氷野櫂、どういふつもりだ？」

「事情があるんですよ、シユウ、あなたは一先ずガイの指示に従いなさい」

「え……？」

今まで蚊帳の外だった二人を呼ぶ、シユウは本当に状況が理解できていないようですが……

「これでやつと……一仕事終わります」

嬉しいのはいいのりだけではありませんがね。

第7話 次郎の真意（後書き）

誤字脱字、感想等がありましたら、よろしく願います。

第8話 帰還（仮）（前書き）

遅れながらも投稿させていただきませう。

まったく話は進まず、読みにくい点があるかと思ひますので、ご指摘のほうよろしくお願ひします。

設定を少し追加しておきました。

第8話 帰還（仮）

私は今、葬儀社の本部にいます。

実をいうとあの後ガイたちを振り切ってきました。

私の計画がばれてしまうと後々面倒だからです、心苦しいですがまだ皆さんにはつらい思いをして貰いましょう。

そんなこんなで、やっと私の部屋の前につきました、案外葬儀社のメンバーに会わない物ですね、抜け道を使ってきたからでしょうか？そんな事を考えつつ、私は自分の部屋に入る。部屋に入ると思ったよりも綺麗になっていきます、多分誰かが掃除してくれたのでしょう、アルゴが汚したカーペットはシミ一つなく、部屋は埃一つありません。

「掃除してくれるのはありがたいですが、部屋の配置は変わっていませんよね？」

アヤセに部屋の物は好きにしていいいなんて言いましたが、今更になつて少し後悔です。

数分部屋を見回してみますが、特に問題はないようです。

ベッドの上に荷物を置いて、ベッドの下に置いてある物を引っ張り出します。

それは縦1.5m、横80cmの鋼鉄のトランクで中をさっそく確認します。

蓋の端にあるボタンを押すとパスワードを打ち込む機器が現れます。

「たしか………パスワードは………」
「Zirrotty
our」

打ち込んでみるが開きません、この箱は一度しか開けていませんのでパスワードを忘れてしまったようです。10分ほど色々なパスワード打ち込んでみますが反応はありません。

さすがにイライラしてきました。これで80回目の入力です、打ち込むのが「souggissa」

壁を支えにゆつくりと進んでいき着替えが入っているタンスを開けます、シャツを乱暴に脱ぎ捨てると、タンスの中から適当に服一式を引きずり出します。

しかし、体はベトベト、一先ずシャワーですね……………

~~~~~入浴中~~~~~

入浴後、葬儀社のズボンに黒いTシャツを着て一息つきます。

とりあえず水が飲みたいです、そう思い冷蔵庫を開けます。

すると、中に入っていたのは大量のプリンでした、数は多分30は超えているでしょう。

きつと罪滅ぼしのつもりですかね？

私はペットボトルの水500mlを一息に飲み干すと、台所に置いてあるスプーンを持ち早速プリンの蓋を開けて食べます。

味は悪くありません、これはスーパーの市販品ではなく洋菓子店のプリンでしょうか？

すぐに一つ目を食べ終わり、すぐさま二つ目、三つ目のプリンを食べて行きます。

やはり入浴後はプリンが一番ですね。

「……………プリン？」

そう言えばパスワードは……………

試しに『Puttchin' Pudding』と入力します。

久しぶりに食べたプリンを見て思い出しました。そう言えば数年前に食べたプッチンプリンのあまりの不味さに激怒した覚えがあります、この鋼鉄のトランクは同時期に購入したものですし。

すると、機械音が流れ見事にトランクは開きました、我ながらアホなパスワードにした物です。もう少し考えてパスワードは決めるべきですね。

そんな事を考えつつ、中身を確認します。

中身は大きめの茶色いコート、催涙効果付きのスモークグレネードが7つ、サイレンサー付きのサブマシンガンとハンドガンにスタングレネード7つ、ほか弾装多数……

私は体中に武装を施していきます。

まず体にガンベルトを装着しハンドガンを仕舞い込みます、その上に茶色いコートを着てコートの内側にはグレネードをしまつとポケットに弾丸を入れます。

そして最後に秘密兵器2と3も……

それらを装備終了すると荷物を背負い部屋を出ます。

そつとドアから顔を出し左右確認、

「右見て……左見て……もう一度右見て……」

人っ子一人いません、そう言えば先ほどシャワーを浴びていたら歓声が聞こえましたが、ガイは演説でもしていたのでしょうかね、そんな事を考えつつ、廊下を進もうとした瞬間、誰かに声をかけられました。

「どこにいくんだ？そろそろ作戦が開始される」

「いえ、ちよつとトイレに……」

「氷野櫻、お前はトイレに戦争でもしかけるつもりか？カバンからのぞいているのはスナイパーライフルじゃないのか？」

さすがに逃げられませんか、そこまで甘くはありませんでしたね。

「ガイ、もしかして最初から気づいていました？」

振り返るとそこにはあきれた顔をしたガイがいた。一人だけのようだ。

「もしかしなくてもだ、お前の行動は全てツグミが監視していた」「部屋の中ですか？」

さすがに私の部屋の状態を見られてしまうのは困りますね、まだアリの事は誰にも知られたくないので……

「いや、さすがにそこまではしない、部屋から出る所を捕まえれば

いい話だからな」

「そうですか、ですが私は行かなくてははいけません、人質になった皆さんを助けなくてははいけませんから」

「それなら俺たちと」

「

それは無理です」

私は即答した、これ以上この場に留まると私の作戦に支障をきたしますね。

申し訳ありませんがガイの目を少しの間封じさせて頂きましょう。

「ガイ、実は私は氷野櫛 次郎が本名ではないのですよ」

「なに？」

そう言いながらガイに少しずつ近づいていく、さりげなくポケットに手を入れ秘密兵器2を握る、ガイは身構えますが反応が少し遅いですね。

「本名は」

「

話しかけつつノーモーションでガイに接近しポケットの中の秘密兵器2を取り出し吹き掛ける。

「な！？くそ！！」

ガイは目を押さえませんが時すでに遅いです。私が今使用したのは秘密兵器2『ワサビスプレー』です。

ワサビエキスを濃縮し粘度を高めていますので最低でも10分は苦しみます。

現にガイは悶え苦しんでいますし、これは成功ですね。

「ガイ、いつでもでも油断は禁物ですよ、ああ、それと先ほどの名前の件は全くのウソです、では明後日辺りに会いましょう」

そう言うて私は葬儀社の本部を走った、多分ツグミが監視しているかもしれないし、急いだほうが得策です。

数分も走ると外に出て、近くのビルに逃げ込みます。

ゴミやらなんやら散乱していますが長居しませんのであまり気にしません。

私はカバンの中に入っている通信機器を取り出し耳に装着すると、

G H Q、葬儀社の通信をいつでも拾える状態にして準備完了です。

さあ、ミッションスタートです。

## 第8話 帰還(仮) (後書き)

明日から冬休みなのでなるべく早く投稿して行きます。

第9話 アンチボディース（前書き）

今回は氷野櫛は一言しか喋りません。

## 第9話 アンチボディース

桜満 集は現在ダクトの中を移動していた。うす暗く狭いのでほふく前進しながらの移動を強いられているが問題はそこではない。

一緒に行動しているいのりが前にいるのだが、いのりは現在次郎にも怒られた例の『前ががばつと開いた服』を着ているのだ。一応上には葬儀社のジャケットを着ている物のズボンは履いていない。必然的にシユウの目の前にはいのりのヒップがある訳だ。

しかしシユウは健全なる男である以前に性根が優しく清らかな青年である。

そんな彼が目の前の光景を凝視できるはずもなく目を反らす。

だが、それが原因とも言うべきか、シユウは嫌な物を見てしまった。ダクトの小さな通風口の間から見えた物、それはGHQの兵士である、アンチボディースが人質に暴行をしている姿だった。

座っていた人質の首を掴み持ち上げ、銃口を差し向け、

「無駄な抵抗を！！吐け！！リーダーは誰だ！！言え！！」

シユウはその姿に衝撃を受けた、そして同時に自分が今助けてあげる事の出来ない自分に対し、無力感も感じていた。

自分が王の力を使えば助ける事が出来る、しかしそんな事をすると、もつと多くの人たちを助ける事が出来なくなる。

葛藤だった。

しかし、いつでも、どこにでもいるものだ、主人公を助ける仲間が

.....

シユウの付けている通信機にザザッとノイズが走り声が聞こえた。

「シユウ、あなたは前だけを見なさい」

シユウは氷野櫛のメッセージを聞いた、その瞬間だった。

人質に暴行を加えていた兵隊は頭から血を流し倒れていた。

ほかの兵士が何事かと状況確認をしようと周りを見ている瞬間にも、一人、また一人と倒れて行く。

「シュウ、もしかして……………」

「ああ、氷野樫さんだ……………」

兵士は物の10数秒で全滅してしまった。恐らく銃撃をしたのだから音が全くなかった事を鑑みるに、サイレンサーでも装着していたのだろう。

シュウは氷野樫さんの凄さを実感すると同時に恐怖感も感じていた。しかし、立ち止まってなどいられない、早く先に進まなくては……………

シュウはいのりとともにダクトを進んでいった。

ちなみに、そんな使命感を感じつつも目のやり場に困るシュウであった。

六本木の元大通りである場所は今、殺伐とした雰囲気にも包まれていた。

大量の兵士が人質を囲み、今にも撃ち殺そうと銃を構えている。

そこには抗議する子どもをつれた女性の姿も見え、今にも女性の夫が殺されそうになっているの事を察する事が出来る。

「やめてください！！夫が何をしたって言うんですか！！」

女性はGHQの兵士に縋りつき懇願する、子供がトイレに行きたいと女性に言うが女性は子供を不安にさせないようにいつも通りに振舞おうとしている。

しかし、それが見るものは痛々しさを感じた。

「その人病気じゃありません！！お願いします！！」

しかし、女性も懇願にも聞く耳を持たずGHQの兵士たちは何も答えない。

その時だった、女性の目に一人の男が目に写った。

金髪で、ピッチリとしたスーツを着込み白い一輪の花を持った男だ、見るからに好青年といった風情で、花の香りを楽しんでいてこの場では一番話の分かる人間と思えた。

しかも、この場所にいると言う事は軍人なのだろう。そして、一言。

「切ない光景だね……胸が震えるよ……」

あたかもこの状況を悲しんでいるような物言いだ。

女性は一縷の望みを賭け、その男に縋りついた。

「軍人さん！！助けてください！！お願いです！！」

女性は縋りつくと同時に、男の持っていた花びらが散ってしまった。男はその散った花を屈託ない少年のような瞳で見つめていた、しかし、その瞬間男の態度は急変した。

顔を醜く歪ませ女性を振り払い叫んだ。

「何をすんじやクソアマアツ！！」

そして腹部を蹴りつけ、さらに地面に倒れこんだ女性の顔を足蹴にした。

「菌がうつるだろうがあっ！！」

さらに蹴りを加え続け辺りに血飛沫が待った。

そして、その映像を見ている人間は数人いた、いのりとシユウ、そしてグエン少佐とオペレーターである。

グエン少佐はその映像を見て何も感じてはいなかった、感じたことと言えば金髪の青年、ダリルが気に食わないといったただけだろう。

グエンは部下に命じた。

「フツ……やりたまえ、奴らを殺せ！！」

しかしグエンは一つ重大なミスを犯していた、目の前の任務に集中しすぎて兵士からの定期連絡がこない事を気にも留めていなかったのである。

その時ダリルはハンドガンの鋼管をスライドさせ女性に標準を合わせる。

周りの兵士たちも同じように人質に銃を向けた。

この時葬儀社メンバーは相当焦っていた。チームは未だに配置につけず、いのりとシユウはまだ待機の指示を受けていない。

葬儀社メンバーと人質達の緊張感は最高潮に達した。

ダリルが引き金を引く瞬間、葬儀社メンバー全員に同一人物からの通信が入った。

一瞬のノイズの後、一言だけだが、なつかしい声が聞こえた。

『援護します』

次に聞こえたのは金属の塊が大量に転がる音だった。

それはダリルと兵士たちの足元に転がり下を見る。円柱の形で素材は鉄、ダリルはそれを拾おうとした瞬間だった。円柱の鉄から穴の開いた棒が飛び出し、そこから大量の白いガスが噴出した。

「なに！？」

そのガスをもろに受けてしまったダリルは目と鼻、のどに強い刺激を感じた。

この時ダリルは、この刺激は昔食べた日本の料理に入っていた『わさび』に似ていると走馬灯のように思い出していた。

他の兵士はなんとか目は防護していたが、目と鼻はそういう訳にはいかない。

鼻はツンツと痛み、のどはイガイガと痛む。

だが、次の瞬間兵士たちはその痛みを感じる事はなくなった。白い闇の中、次々に首を切られ倒れて行ったからだ。

「クソオツ！！クソオツ！！」

目、鼻、のどに凄まじい痛みを感じながらも、エンドレイヴの操縦席があるトレーラーに駆け込んだ。

この時、やっとチームは所定の場所に到着し、ガイは作戦を開始、大量のミサイルを射出させた。

ダリルは鼻水と涙を流しつつエンドレイヴを起動、発進させた。

何とも締まらない光景である。

## 第9話 アンチボディース（後書き）

誤字脱字、感想、よく分からない点がありましたらご指摘ください

## 第10話 居場所（前書き）

なんとか完成しました、分かりにくい文面、誤字脱字、感想、要望  
がございましたらご意見お願いします。

## 第10話 居場所

元六本木の地下奥深く、地上ではちょうどガイたちの作戦が決行されている時、4人の男たちは取引を交わしていた。

4人のうち3人は葬儀社のメンバー、仮に坊主頭の男のをボウズ、パーカーを着ているのはパーカー、茶色い髪の毛はチャパツと呼称しよう。

そして3人の取引相手はGHQの兵士だ、兵士はボウズに茶色い封筒を渡した。

「ちゃんと150万入ってるんだろうな……」

ボウズは封筒の中身を出し確認を始め、手慣れた手つきで金額を数え始めた。

実はこの3人、すでに前金として半分の150万を受け取っている。その対価はGHQに葬儀社の情報を流すこと、数年しか葬儀社にいなかった3人にとっては葬儀社そのものに愛着などなく、計300万、情報を流すだけで一人頭100万という金額はあまりにもウマイ話であった。

もちろんGHQにも利点があり、たった300万で情報を得られるとすれば、いたずらに兵士を消費することなく、300万で情報を買うと言うのは安い買い物であった。

「私はもう行く、上ではすでにお前らのお仲間を捕まえているはずなのでな、早く本隊と合流しないとまずい」

兵士はそう言うと、足早に去って行った。  
ボウズは兵士に気にも留めずに金勘定をしている、ほぼ金額の計算は終わっているので問題はなかった。

ボウズは兵士が去った数10秒後、封筒に150万入っている事を確認し、パーカーとチャパツに50万ずつ渡した。

「へへッ、少し情報を渡すだけで一人100万、こんなにうまい話はねえな」

チャパツは降つて湧いた金に頬が緩むのを隠せなかった、一方パーカーはと言うと受け取った金を無造作にポケットに仕舞い込み、二人に背を向け去ろうとする。

「オイ、これから飯を食いに行くけどお前はいかねえのかよ」

「いい」

それだけ言つてパーカー去ろうとした。

「ツチ、付き合い悪い野郎だぜ」

チャパツは悪態をつくがボウズがそれをたしなめる。

「いいじゃねえか、あいつはいつもあんな感じだろ」

パーカーは悪態を聞きつつ、これからについて計画を考えていた。

これ以上この国にいるのは危険だと感じ、国外逃亡をしようと思つていた。

しかし、全てが遅かった。

「あまり見ない顔ですが、皆さんは葬儀社の新入りですか？」

唐突に声が聞こえた。3人は坂の上を見ると一人の男がこちらを見ていた。

G H Qの人間ではない、しかしどこかで見た事がある、チャパツとボウズは考えていた。

だか答えはすぐに出た、その正体をパーカーが知っていたからだ。

「氷野樫さん……ですよね？」

その名を聞いて二人は戦慄した、二人はあまり氷野樫 次郎の事を知らないがパーカーは知っていた。

ナイフの名人でもあるアルゴを育て上げ、参謀である四分儀並みの判断力を持ち、葬儀社のリーダーであるガイも絶対の信頼を寄せている人物だ。

まともにやりあつて対抗できる人間ではない、しかし今の話は聞かれていないかもしれない、パーカーは内心心臓が止まりそうな心持で氷野樫から話しかけてきた。

「あなた方はここでなにを？」

氷野樫の質問にパーカーは冷静に答えた、後ろの二人に喋らせたら

うつかりボ口を出すかもしれないと考えたからだ。

「俺たちはガイさんに隠れてるって言われました、まだ葬儀社に入  
って間もないんで……」

パーカーの言葉にチャパツとボウズも便乗してきた。

「そうなんすよっ！！ガイさんが俺らに気を使って！！」

「本当は作戦に参加したかったんですけど！！」

氷野樫は顔に笑みを浮かべたままだった、何も答えない。

チャパツとボウズは沈黙に耐えきれずに薄ら笑いをするが、その笑  
い声は虚空に消えて行った。その後、嫌な沈黙が流れる。

その沈黙に耐えきれなかつたのか、パーカーは氷野樫に質問をした。

「氷野樫さんここで何を？確か葬儀社を抜けて二度と戻らない  
と聞きましたか？」

「ええ、確かに言いましたけどあれは一時の気の迷いだったんです  
よ、今日にでもガイさんに戻りたいと言おうと思ってますね」

氷野樫は笑みを崩さない、まるでその目は全てを見通していると言  
わんばかりだった。

「じゃあ今からガイさんの所に行くんですね！？なら早く言ったほ  
うがいいですよ！！」

「いえ、その前に一つ仕事がありました……」

氷野樫の目つきが変わった、その目は鋭く開かれ殺気を飛ばしてい  
る。

チャパツとボウズは裏切りがバレたと確信して、支給されていたハ  
ンドガンを構えた、射線中にはパーカーがいたが構わずに引き金を  
引こうとする。

しかし引き金は永遠にひかれる事はなかった。チャパツとボウズは  
体に痺れを感じハンドガンを落とし、膝について倒れた。

「体が……」

「なんだこれ……？」

チャパツとボウズは自分の身に何が起きたか理解出ていない、しか  
も二人にはゆっくりと睡魔が襲い掛かり、眠りに落ちる。

「氷野榿さん……これは？」

パーカーは恐怖感を感じながらもなけなしの勇気を振り絞り聞いた。  
「遅行性のスタンガス、催眠付きです、空気より重いので下にたまるんですよ」

パーカーはなぜ自分と氷野榿が倒れないのか分かった、

「俺を……殺すんですか？」

「……もちろんです」

氷野榿の言葉を聞いた瞬間、腹部に鋭い電流が走った、腹部を見ると氷野榿がスタンガンを押し当てているのを確認し、意識は闇に落ちた。

俺は体中に痺れを感じ目が覚めた、しかし体は動かない。

体を見ると体が鎖で椅子に固定され身動きが取れないようになっていた。左にはボウズとパーカーが同じような様だったが、まだ目が覚めていないようだった。

「オイ！！お前ら起きろ！！」

だがまだ目を覚まさない、死んでいるのかと錯覚を起こしたか、二人は眉を顰めゆっくりと目を覚ました。

「あれ……俺は一体……？」

「ここは……」

ボウズとパーカーはボウツとしていて、状況はまったく把握できていないようだった。

「しつかりしろ！！俺らはあの氷野榿って野郎に捕まったんだよ！

！」

口に出して言ったが今だに信じたくはなかった。

アイツは確実に俺たちを裏切り者だと確信していた、このままだと確実に殺される。

どうにかして鎖を外そうと体を動かすが、ビクともしない。その時だった、近くで足音が聞こえ、少しずつこちらに近づいてきているようだった。

そして暗がりの中から、俺たちを捕まえた張本人、氷野櫛 次郎が現れた。

「目が覚めたようですね」

抑揚のない声で俺たちに話しかけてくるその姿は不気味だった、顔には表情が泣く右手にはハンドガンを持っていた。

「あんた……俺たちを殺す気か!!」

ボウズは大きな声で叫ぶが答えない。

氷野櫛はハンドガンの鋼管を引き、ボウズの頭に銃口を付けた。

「あなた方以外に裏切り者は？」

驚くべきほど冷淡な声だった、ボウズは恐怖感で体を震わせ顔を真っ青にしていた。

「あの……何も……」

ボウズは恐怖のあまりうまく言葉に出来ないようだ。

氷野櫛はボウズを銃口から反らし今度はパーカーに向けた。

「あなたは？」

しかしパーカーは静かに首を横に振った。こいつも恐怖のあまり声も出ない。

すると必然的に次に来るのは俺だった。

「ではあなたは？」

俺は全力で首を横に振った、体中から冷たい汗が流れ出てそれが恐怖感を煽った。

すると氷野櫛は何の躊躇いもなくボウズの頭を撃ち抜き、続けてパーカーの頭も撃った。

そしてそのまま俺の頭に銃口を向け引き金を引いた。

「ひい!!」

しかし、銃弾は俺の頭を破壊することなく、カチンツと冷たい金属音がただけだった。

「弾切れですか」

短くそう言うと、ハンドガンの弾装を取り出し、一発ずつ弾を込め始めた。

氷野樫が俺たちを撃つたのは唐突だった、前置きはまったくなくアメリカの映画のように、撃たれる前の長ったらしい口上はない。

となりを見ると二人は額に数センチの丸い穴を作り、そこから血を流して死んでいた。

目は開き恐怖の瞬間をそのまま切り取ったようだった。

「頼む！！見逃してくれ！！俺たち以外に裏切り者は知らない！！本当だあ！！」

俺はみじめにも命乞いをした。涙と鼻水、そして涎を垂らし懇願した。

絶対に死にたくない、うまい飯も食いた、いい女も抱きたい、贅の限りを尽くしたい。

しかもまだ人生の三分の一も生きてねえ！！

だが氷野樫はこちらを見ず、弾装に銃弾を込めながら言った。

「見逃してほしいですか？」

氷野樫は唐突に言った、

「あ・・・？ああ！！死にたくねえ！！頼む！！なんでもするから命だけは！！」

助かる、一瞬だけ考えた幻想だった。

しかし俺は氷野樫に蹴られ冷たいコンクリートの床に倒れた。

「あなた方がG H Qに情報を売ったせいで、何人も人が死にました、私の力が足りないばかりに目の前で、今のあなたと同じことを言っただけ死んだ人が数多くいました」

「すみません！！反省しますから　　ウゴツ！？」

最後まで言えなかった、口に銃口を突っ込まれ口を塞がれた。

「悔い改めよとも、反省しろとも、後悔しろともいいません、ただ死になさい」

今まで無表情だった氷野樫の顔が一瞬歪み泣いているように見えた、

そして言葉を最後に、俺は永遠に眠りについた。

日が落ち始め辺りがオレンジ色に染まりはじめる。作戦は成功に終わりG H Qは撤退し、一息ついた時、俺はシュウを葬儀社に勧誘した。

「来い、シュウ、俺たちとともに、お前にはやれる事があるはずだ」俺は皆が見ている前でシュウに手を伸ばした、シュウの顔は少し驚いた後俺を見て言った。

「いや、僕は普通の生活に戻るよ」

そう、それは少し予想外の返答だった、だが予想が出来ない言葉ではなかった。

「そうか………残念だ」

以外にもシュウを誘うには根気があるようだな。そう思い残念そうに目をつむり、シュウに差し出した手を下げようとした。

その瞬間、誰かが手を掴んだ。勿論シュウではない、目を開けるとそこには一人の男が立っていた。

「何をしている？」

「いえ、上げたその手が寂しそうだったものでつい、いけませんでした？」

その男、氷野櫛 次郎は愛嬌たっぷりの顔で言った、何とも憎めない顔でそこにいた。

「いや、よく帰ってきた、お前の仕事とやらは終わったのか？」

そう言うと、少し悲しそうな顔をしていた。しかしその顔は一瞬で消えいつも通りの不敵に笑う顔に戻った。

「ええ、終わりましたよ」

「そうか……仕事は多いぞ」  
俺は次郎と固い握手を交わし、やっと心の底から一息つけたそんな  
思いがした。

第11話 至高の黄色 後悔の花（前書き）

後半はシリアスになっていると思います。

誤字脱字、分かりにくい点、感想がございましたらよろしくお願  
い  
します。

## 第11話 至高の黄色 後悔の花

俺たちは淘汰される者に創造の歌を送り続ける  
故に葬儀社

俺たちは抗う

この国を我が物顔で支配するGHQ

俺たちは戦う

俺たちを淘汰しようとする全ての者と

この言葉が世界に発信されてから世間は騒がしくなりました。

ニュースでは連日ガイの気取った顔が放送され、葬儀社よりもガイが記憶に残ります。

ソファ―に座りながら何度も見ているのですが、映像に写っているガイの顔の角度、あれは一体何なのでしょう？自分が一番カッコよく見える角度なのでしょうか………

「シユウはどう思います？」

そこで私は目の前にいるシユウに話しかけました。

「そんな事より！！なんであなたがここにいるんですか！？ソファ―とテーブル、それに冷蔵庫まで持ち込んで！！葬儀社に帰ればいいじゃないですか！！」

シユウは顔を真っ赤にして怒りだしました。

「シユウ、私との契約忘れていませんか？一つは私について詳しく詮索しないこと、二つ目はこの場所を私の寝床として貸していただくこと、三つ目は三食暖かくおいしい食事を私に提供し三食のデザートを付けること」

「そうですね………でも、本名を聞くぐらいはいいですよ？いろんな名前と呼ばれていましたし………」

まあ、そのくらいなら問題ないでしょう。

「そのくらいなら構いません、勿論ですがアイスマンは本名ではあ

りません、アイスマンと言つのはとある映画からとつた偽名です、私の本名は氷野櫛 次郎、これが本名です」

「氷野櫛さん、聞きたい事があります」

「次郎で結構ですよ」

「次郎さん、あなたは葬儀社のメンバーなんですよね？」

「詮索禁止です」

そんな私の言葉を聞いてシユウは不服そうな顔をする。

「そんな……」

「冗談です、質問には答えてもいいですけど……急がないと学校に遅刻するのでは？」

私はシユウに時計を見せる。

「もうこんな時間！？次郎さん弁当置いておきますから！！夜にまた来ます！！」

そう言うつと慌ただしく廃墟兼自宅兼シユウの秘密基地を出て言った。私の目の前に置かれたのは、見覚えのあるナプキンに包まれた弁当二つと赤い巾着袋。

この巾着袋は一体？

中を確認するとそこには2つのプリンが入っていました！！

ただのプリンではありません！！洋菓子店「NOITAMINA」で限定10個しか作られない限定濃厚プリン、『レガリア』

このプリンはその辺のコンビニやスーパー、チェーン展開している洋菓子屋で売っているような100円〜300円程度の代物とはまったく違います。

お値段は1個850円ですが値段と味を秤にかけると安いものです。その味はまさしく至高、すべての食材はパティシエ自身が自らの足で探し吟味した一品のみで作られています。

そのまま食べると少し甘いと感じる人がいるようですが、そんな人はまだまだまだド素人中のド素人、少し苦みがありますが癖のない大人の味に仕上げたカラメルソースを絡め一緒に頂くのが基本です、まずこのプリンを頂くには絶対！！何があっても！！！！！！

小皿が必要です！！！！！

このプリンの形を崩さぬように慎重に小皿に移すには、まず蓋を開けプリン（・・・）の（・・）容器の（・・）上に小皿を（・・）乗せて（・・・）からひっくり返します。これは鉄則です。

仮にも容器を逆さまにしたら中のプリンが零れかねませんから。しかし小皿ごと逆さまにしたらそのまま持ち上げてはいけません、まず容器を優しく叩き完全に落ちるのを確認してからゆっくり外しましょう。

外す瞬間はカラメルソースが下に滝のごとく流れ落ちるさまを見てから食します。

その味は口に入れた瞬間に下で踊りのどにスルリと落ちていきますが、そのプリンにはスプーンですくうと分かるように、しっかりとした重量感があります。

プリンはしっかりと深みのある味わいですがいつまでも長つたらしく舌に残らず潔く去っていきます。その去っていく味が寂しく、一口、また一口と口に運んでしまうのです。

「フウ・・・・・・・・・・さて・・・・・・・・・・頂きましょう・・・・・・・・・・」

私は巾着袋の中に入っている二つのプリンを取り出し、テーブルの上に置きました。

どこからどうみても確かに『レガリア』です。

実はこのプリン『レガリア』は味だけではなく見た目も楽しめます。プリンの容器は有名な絵描きの先生がデザインし、容器の種類は何と100種類もあるそうです。私は残念ながら30個しか集めていないので残念です。

余談ですが容器だけでも数万円ほどで買い取るコレクターがいるようです、私なら絶対に売りませんが・・・・・・・・・・

ちなみにこの二つはすでに持っていますね。一つは梅、もう片方は桜の絵が書いてあり、桜は私が一番のお気に入り絵柄です。

では前置きはこのくらいにして頂きましょう。

「小皿……小皿……小皿……」

巾着袋を探りますが入っていないようですね、スプーンならあります。……

どうしましょう、こうなったら苦肉の策として弁当のふたを小皿代わりにする方法もありますが、お弁当の中身の味が移ってしまう可能性もあります。

それではこの『レガリア』の味を100%引き出す事が出来ません。仕方ありません、愛用の小皿を葬儀社から持ってきてきましょう。少し面倒ですが仕方ありません。私はそう決心し、とりあえず二つのプリンを爆弾処理班以上に慎重に持ち運び冷蔵庫にしまえます。

「いざ葬儀社!!」

私は全力で走り始めました、そう、プリンのために……

#### 数時間後

私は息絶え絶えに六本木に到着しました、見慣れたボロボロの町並みは前回の奇襲作戦のせいでさらにボロボロになり、真新しい血の痕が見受けられます。

途中で私は目的を忘れふと足を止めました、私の視線の先には牛乳瓶を花瓶代わりにして白い小さな花が添えられていました。

そう、この場所は私が助けられなかった人がいた所です。

脳裏に焼きついた光景が目に浮かびます、GHQの兵士に無残にも撃ち殺され、すさまじい爆炎に呑みこまれる人たち……

私は添えられた花に近づくと膝をつき手を合わせました、こんな事をして償いにはなるとは思いませんが、せめてこれぐらいはしたいのです。

あの時私は容赦なく裏切り者を撃ち殺しましたが、あの行為は掃討作戦を行ったGHQの兵士にも引けを取らない劣悪な行為です。結果的には人質を殺さなかったダリル以下の人間ですね。もしもシユウなら裏切り者を許したでしょう。

もしもガイなら裏切り者を殺したとしても、動揺の一端を後で声に出し悔むでしょう。

私は獣です、かつて仲間だった人間を殺しても表情一つ変化させませんでした。

許すと言われなくても構いません、許してほしいともいいませんが、ただ償いだけはさせてください。

そう口に出し、再び死者に祈る。

こんな私でも、つい心の中で涙を流してしまいそうになります、しかし泣く訳にはいきません。泣いたら止まってしまいます、止まったら振り返ってしまいます、振り返ったら二度と動けなくなってしまういます。

私は泣くまいと思いつつ、目を開けました。

するとそこには花束を持ったガイが立っていました。

「聞いていましたか？」

私とガイの間に夏の風が吹き、その後ガイは口を開きました。

「ああ」

「立ち聞きとは趣味が悪いですよ」

するとガイは心外だと言わんばかりにいいました。

「話しかけようと思っていたら次郎が勝手に喋り出した、人のせいにするな」

「それは申し訳ございません、つい言葉にしてみましたのですよ」再び私とガイは沈黙して一輪の花を見つめます。どこかで見た事のある花だと思いましたが、あの時ダリルが持っていた花ですね、遠目ではよく見えませんでした。が改めて見ると綺麗な花です。

「次郎、お前はなぜ葬儀社にいる？」

ガイは黄色い花の隣に花束を置いて聞いてきました。

「簡単ですよ、それが葬儀社と言う場所が

」

答えるとガイはニヤリと笑い、その後手を合わせました。

「最高の答えだな、お前らしい」

「ふむ？怒ると思ったのですが？」

以外ですね、絶対に殴られると思って答えたのですが……

「その言葉の通りだからな、俺はそろそろ戻るぞ、夕方前には帰っ

てこい、シユウに会いに行く」

そう言っただけでガイは去ろうとしますが私は引き留めました。

「ガイ、すいませんが車出してもらえますか？」

さすがに歩いて戻るのには辛いです……

第11話 至高の黄色 後悔の花（後書き）

ガイの質問の答えは追々判明します。

ちなみにですが、次郎は17歳以上なのでヴォイドを出す予定はありません。

## 第12話 仕事（前書き）

今回は話がまったく進みません。  
更新が滞っているのに申し訳ないです。

## 第12話 仕事

ちようどお昼の12時ごろ、目当てのお皿とついでに雑貨類を持った私は大雲に元大学の廃屋まで送っていただきました。

車で送っていたのでつい沢山持ちすぎてしまいました、まるで登山に行くようなリュックの膨らみようですね。

「次郎さん、3時ごろに迎えに来ます」

「はい、ありがとうございます」

大雲はそれだけ言うと車を発進させ、さっさと帰ってしまいました。私はああいう大雲の寡黙なところが気に入っています、体は大きく力持ちで心優しいとはまるで物語のキャラクターのようですね。

「さてと……」

リュックに入れた重い荷物を背負いつつ、ゆっくりと橋を渡ります。背中の荷物はガチャンガチャンと音を立てますが、大事な小皿はしっかりと梱包したので割れる心配はないでしょう、壊れて困るのは部屋から持ってきた秘密兵器とその作り掛けが壊れてしまう事です。実は数年前に秘密兵器2のワサビスプレーの原液を製作途中で部屋一面に溢してしまい困ったことになりました、しかし真に困るのはその後でした、部屋の中が暑くなっていたので溢した原液が気化し、ガス状になり葬儀社本部を混乱の増埒に叩き落としました、あの時はガイたちに本気で怒られましたっけ……

過去を振り返りつつ廃屋に入ります、ソファアに座りプリンを頂く前に荷物の整理を行わなくてはいけません。

とりあえずリュックの中に入っている物を全て出します、まず包装紙で包んだ小皿、そして大事な秘密兵器とその作り掛け、その他雑貨類をシューが作ってくれたお弁当を片手に整理するとしましょう。

30分後

それほど時間はかかりませんでした、秘密兵器はかなり持つてきましたけども不具合はなく、正常に作動しました。作り掛けも問題ないようですね。

雑貨類は端に置いておけば問題ないでしょう。

さて、そろそろ本番です。『レガリア』を頂くことにしましょう。冷蔵庫に近づき『レガリア』を一つ取り出します、しかしその時、辺りに電子的な機械音が流れました。

ピピピ。ピピピという聞きなれた音です。

「こんな時に電話ですか……」

私はポケットの端末を取り出すとどうやらガイのようです、一体何の用でしょうか？

「氷野樫、いますぐ出かける準備をしる、本部仕事だ」

「……」

「少し事情が変わった、10分後に迎えに行く」

これから『レガリア』を食すと言うのに……

「あの……行かないという選択肢は……」

「ない」

ですよね、さすがに我儘をこれ以上言う訳にはいきませんが、葬儀社に戻ったら前以上に働くと言ってしまいましたし。

「分かりました、待っています」

「迎えに行くのは大雲とキヨウだ」

「キヨウ？」

大雲が迎えに来るのは分かりませんがなぜキヨウが？

「お前、葬儀社に戻ってからキヨウにあってないだろ、どうしても会いたいらしい」

言われてみるとそうでしたね、顔ぐらい見せなかったのは失礼でした。

「了解です、何か持っていく物は？」

「そうだな、強いて言えばお前のあやしげな秘密兵器を適当に見つくるって持ってこい」

「私の秘密兵器？構いませんが……」

「頼んだぞ」

「ガイはそれだけ言うとは切ってしまいました、一体どういう事でしょうか？ガイは私の秘密兵器をあまり好んでいないはずでしたが……」

「まあよしとしましょう、今必要な物は最大限利用すべきですからね。一先ず『レガリア』を冷蔵庫にしまい、整理した秘密兵器を再びカバンにしまいはじめます、しかしせっかく整理したので面倒な物です。」

悪戦苦闘しつつ秘密兵器をリュックにしまいおわると、ちょうど大雲とキヨウがやってきました。

「氷野樫さん！！やっと会えました！！」

「シオルダーバッグを身に付けたキヨウは私の元に駆け寄り、大雲はノソリと現れました。」

「キヨウ、私の顔が見たいなんて奇特な人ですね」

「そんなことないです！！本当にうれしいんですから！！」

天真爛漫といますか、キヨウは本当にいい子ですね、こつこつ子ばかり葬儀社に出入りしてほしくないのが本当のところ。あそこはとても危険ですから。

「キヨウ、氷野樫さん、そろそろ」

大雲は急かすように私とキヨウを呼びます。

「すぐに行きます、大雲、申し訳ありませんがリュックを持って頂けますか？さすがに重くて持つのが大変です」

「お願いすると大雲は小さくうなずきリュックを持ってくれました。しかし持つ時大雲の顔は一瞬歪みました。」

「氷野樫さん、これは一体何キ口あるんですか？」

「分かりません、100キ口は絶対はないと思いますが……」

その言葉を聞いたキヨウは苦笑していました。が、実際かなりの重さですから結構危険です。落としたはずみで大爆発とか起こしかねませんし。

「行きましょう」

大雲はそう言つてリュックを担ぐと先に出て行きました。

「では私たちも行きましょう」

「はい!!!」

キヨウは私の後を小走りですべてついてきます、子犬に懐かれた少年時代を思い出してしまうのはなぜでしょうか？キヨウが子犬に似ているからですかね？

「氷野樫さんはなんであんな廃屋に住んでいるんですか？本部はもっと綺麗で過ごしやすいのに……」

「それもそうですが私の場合は過ごしやすさより、別の事に趣を置いて生活しているのですよ」

「別の事？」

「ええ、人間の生活で欠かせないのは『衣・住・食』です、私は『食』です、おいしい物が頂けるのであればある程度酷い環境でも生活しますよ」

橋を渡るころには大雲はすでにジープに乗り込みエンジンをかけています。

さすがに急いだほうがいいですね。

「あそこで『食』って……」

キヨウは立ち止まり振り返りと廃屋を見つめる、私の言葉に違和感を覚えたのでしょうか。

さすがにあんな所でおいしい料理が味わえるとは思えないですよ。

「とある男の子と約束を交わしまして、助けるわかりに3食+デザートを頂くんですよ」

「そんなにおいしいんですか？」

「おいしいと言えばおいしいのですが、強いて言えば……」

・口に合うんですよ」

本当においしい料理を食べたいのであれば高級なレストランにでも入ればいいのですが、口に合う料理とは中々見つかりません。

「口に合う？」

「味付けとかそういうものではなく………口で言うのは難しいですね」

そう言うと私はジープに乗り込んだ。キョウも続いて乗り込み首を傾げる。

キョウが分からないのも無理ありません、私もよく分かりませんから。

「行きますよ」

大雲はそう言うのとゆっくりとジープを発進させた。

「そういえばキョウ、ガイは私に何の用で呼んだのですか？何も聞いていないのですが………」

「それは………」

急に空気が重くなりましたね、もしかして結構外道な仕事ですか？

「氷野樫さん、今回の仕事の内容は端末に送信しておきます」

大雲は運転しながら座席付近にある端末を操作し始めた、数秒後私の端末にとあるデータが送られてきました。

これはなかなか………」

「氷野樫さん、一体何のし」

横から端末を見ようとするとキョウの視界を閉ざし端末をしまつ。

「キョウは見てはいけません」

あまり純粹な少年に見せられるような内容ではありません、正直好ましくありません。

陰鬱な心持をしつつ、ジープは葬儀社本部に向かって行きました。

## 第12話 仕事（後書き）

次回こそ、早めに投稿します。

感想、良い点、悪い点、分かりにくい箇所がありましたらよろしく  
お願いします。

第13話 工夫すればやれない事なんてない(前書き)

今回はグロ注意かもしれません。

### 第13話 工夫すればやれない事なんてない

空は青く澄み渡り雲一つない天気、そよ風が通り抜け頬をくすぐり、暖かい日差しの過ごしやすい日です、このまま土手に行き昼寝をするのは最高に気持ちのいい事でしょう。

しかし、そんな天気と願望とは裏腹に私の心は重く沈痛なもので、今いる場所は埃っぽい葬儀社本部です。

ここは上を見上げればクモの巣の張った天井が見え、風は何かの排気ガスの香りがして日差しなんてまったくありません。

やはり生活環境を改善したほうがよろしいかもしれませんね。

「来たか氷野樫」

大雲とキヨウに連れられ私は部屋の前に来ました、あまり見覚えのない部屋で扉の前にはアヤセとガイがしかめっ面で立っていました。「来たか、資料は勿論呼んだな？」

ガイは私の姿を見るなりいきなり聞いてきました、また焦っているのでしょうか？

「ええ、一応見ましたが……なぜこんな事に？あなたらしくない手だと思つのですが？」

「あの……私のせいなんです」

その場にいたアヤセがポツリと呟いた。

「どう言う事ですか？」

アヤセは泣きそうな顔で話し始めた。

「私が買い物に行こうとしたら男の人が絡んできて、つい……  
……」

「つい？」

「足を払って頭から落としてしまったんです……」  
その光景が頭の中で容易に想像できました、アヤセはかなり初心な所がありますから我慢できなかったのでしょう。

「それが六本木の住人だったらよかったのだが、それがGHQの幹

部だと言つのならば話は別だ」

「で、拷問と言つ訳ですか？」

「言い方が悪い、尋問と言え」

ガイは眉間にしわを寄せて言いました、私からすればどちらも似たようなものだと思つのですがこの際どうでもいいですね。

「今回の私の仕事はG H Qの幹部から有益な情報を聞き出す事ですね？」

ガイは小さく頷くと扉を開けました、そこにはボロボロの服を着た一人の男がこちらを見ていました。

男のその目は自身に溢れ、如何なる者にも屈しない覚悟と根性が見てとれます。

これは結構面倒な相手ですね。

とりあえず近づいて話しかけてみることにしましょう、まずは「ミニケーションをとらなくてはいけません。

「始めまして、貴方のなま

その瞬間、いきなり唾を吐きかけられました。男が吐きかけた唾は私の眉間を直撃しダラリと垂れた。

「話す事などない、私を開放しなければG H Qの兵士がここに大拳してくるぞ」

それだけ言つと、何も言う事はないと言わんばかりに男は目を閉じてしまった。

私は黙つて部屋を出た。

「氷野櫻、手ごたえは

部屋を出るとガイは話しかけてきました、私の顔を見た瞬間冷や汗を流し始めました。

「ガイ、すいませんが何か拭く物を」

「あ、あのこれを使つてください」

キヨウは横からタオルを渡してきた。私はありがたく使わせてもらい顔を拭く。

「ガイとアヤセにお使いをお願いします、やって頂けますね？」

私は二人にお願いすると黙って頷いてくれました。

「分かりました、何をすれば？」

アヤセは顔を引きつらせながら聞いてきました。

「近くのスーパーで×××××と×××××を買って来てください  
買ってくる物を言うと二人は不思議そうな顔をして首を傾げる。

「そんな物を何に使うんですか？」

「何を吐かせればいいか分かりませんが……あの男の  
人が喋りやすくなるようにお手伝いするのに必要なですよ」

思わず笑みがこぼれる、さすがにあの程度の事で怒りはしません、  
ええ怒っていませんとも、しかし少しイラツときただけです。

「アハハ……そうですか……」

キヨウは若干引いているようですが仕方ありません、今の状態で鏡  
は見たくありません。

「大雲、部屋にいる男を目隠しして釣るして置いてください、眠ら  
せても構いません、それと耐火性のある銀のトレーとガスバーナー  
を用意しておくように」

私の言葉を聞いた瞬間、周りの皆は顔を青くする。皆さんは一体ど  
んなことを想像したのかはすぐに分かります、考えが安直ですね。

「皆さんには人を傷めつけない尋問を見せましょう」

さて、どのくらいで口を割るのか楽しみです。

「ウウツ……」

俺はカツンツツと言う鉄の音を聞いて目が覚めた、しかし何も見えな  
い。

目隠しをされているという事に気づくのに数秒かかってしまった。

視界が布らしき物に遮られているので状況はよく分からないが、分  
かる事と言えば両手を縛りあげられ吊るされている事と、上半身裸

だと言う事だ。

「目が覚めましたか？」

若い男の声が聞こえる、声が反響してどこにいるか分からないが、俺が何かの薬品で眠らせられる前に聞いた声だ、おそらく俺が唾を吐きかけた優男だろうが俺は何も答ええない。

自慢じゃないが俺は痛みにはかなり強い、そして拷問に耐えうる精神力だつて持っている。

絶対に吐く事はない。

「質問をします、あなたの名前は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

辺りを沈黙が支配する、俺はこの後何かしらの痛みが来ると予想した、しかしいつまでたつても痛みはこない、俺から何かしらの情報を吐かせようと拷問するかと思つたのだが違うのか？

「知っていますか？人間の肌は一定の高温で焼かれると冷たく感じるのですよ」

優男はいきなり喋りはじめた。

「その温度の炎で焼かれると痛みもなく、冷たい感覚と肌を焼かれた時に流れる体液と肉の焦げた匂いがするんです、こういう風に」その言葉の直後、ボツと言う音がしたと思つたと俺の背中に冷たい感覚と肉の焼けるにおいがしてきた。

「ウワアアアアアアアアアアツ！！！！?????」

コイツ！！俺の背中をバーナーで焼いてやがる！！？

徐々に俺の背中から液体のようなものが流れ始めた、きつと血か何かだろう。

「どうですか？お話す気にはなりましたか？」

狂つてやがる、コイツは人を焼き殺しても何も思わない、そんな人間だ、まっとうな人間が人を焼いて平気でいられるはずがねえ。

こいつは間違いなく狂人だ、葬儀社つて言うのは全員こつこつ奴ばかりなのか！？

「話しませんか？それならもう少し焼くだけです」

再び背中に冷たい感触と肉の焦げるにおい、そして背中を伝う血、  
だが話す訳には……

「肉の焼ける香りって……すぐいいですよ？食  
欲をそそる」

その言葉を聞いた瞬間、俺の心は完璧にへし折られた。

これ以上続けられたら体の前に心が壊れる、背中に血が流れ落ちる  
感覚を感じながら、力なく俺は喋る。気持ち的にはあきらめに近い  
かもしれない。

「分かった……話す、何でも聞け」

「よかった、では質問します」

「

**第13話 工夫すればやれない事なんてない（後書き）**

感想、誤字脱字、よく分からない点がございましたらよろしく願  
いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8502y/>

---

すべてを撃ち抜くスナイパー

2011年12月30日01時45分発行